
呪い屋

しみちゃん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

呪い屋

【ZPDF】

Z9991D

【作者名】

しみちゃん

【あらすじ】

ある日、私はいじめにあつた。発端はとても有り触れたこと。

(前書き)

私の主観で書いた話なので、考え方と相手によつては、私の人間観について腹を立てるかもしれない。ご注意下さい。

私は賢しいから、夢なんて見ない。

夢なんて見ても、裏切られるだけだから。

そう思つたのは、何時だけ？

何時もの様に、教室のドアを開ける。

何時もの様に、罵詈雑言が私を迎える。

（今日は空き缶と、黒板消し付きだった。）

「汚つたねー。」

は？お前らのせいだる…。

「学校来んよ。」

来たくねえよ。

こつちだつて。

けど高校は義務教育じゃねえんだから、休んだら進級危ういんだよ。

「死ねば？」

こつちだつてお前らの相手疲れてんだ。

こつちだつて死にてえよ。

けど、お前らみたいな、カスの為に死ぬには、勿体無いだろ？

何時からだつただろうか？

気が付けば、私は独りだつた。

ある日、同じクラスの子が、軽い火傷を負つた。
事の発端は、とても有り触れた事だつた。

近くに誰も居なかつたから、私は処置を施した。

(薄々気が付いていたけど、私はこの子に嫌われていた。)

その次の日、その子から手紙が来た。

『嫌いだつたけど、仲直りしましょう。』って。

普通なら、『ありがと』って返すだろうね。

でも、私はこの手紙が、凄く腹立たしかつたんだ。

嫌いなら…ずっと嫌いでいたら良い。

だつて、自分を嫌つて居る人と、完璧に仲良くなれる?

そんな夢物語、ありえないでしょう。

だから、私は本心を暴露した。

本当なら、一対一で済む話だよね?

でも、気付けば、一対三十九になつてたんだ。

別に、その子が卑怯だとは、思わないけど。

所詮、人間なんて…。

家に帰つて、メールを見る。

『新着メール1件』

T中の細江を呪つて下さい。

その『細江』らしき人物の顔写真も添えつけてあつた。

私は『呪い屋』をやつていて。
依頼が来たら、そいつを呪う。
もちろん無償で。

(つづく、私つてお人よしだな…)

『細江』の顔写真をプリントアウトして、藁人形に貼り付ける。
後は、午前一時に、家の境内の裏にある神木に打ち付けるだけ。

私が一番最初に呪つたのは、婆さんだった。

母は、私が幼い時に死んだ。

過労死だった。

全ては婆さんが原因。

婆さんは、母を毎日の様に、いびり倒していた。

それに疲れたのか、ある日、母は静かに息を引き取つていた。

婆さんが私に白羽の矢を立てたのは、すぐの事だった。

学校から帰るのが少し遅ければ、罵られ、打たれる。

風呂場に髪がへばり付いていたら、ヒステリックに叫び、また打つ。
夕飯の味付けが気に入らなければ、料理を投げつけて来る。
(毎日毎日、母さんは耐えていたんだ)と思うと、自然と涙が出た。

ある日、学校で借りた本に『丑の刻参り』について書いてあつた。
何でも、藁人形にムカツクやつの写真を貼つて、夜中の一時に、藁
人形を五寸釘で神木に打ち付けると、『写真の相手を呪えるらしい。
怨みが深ければ深いほど、呪い殺す事も可能らしい。

私は、早速藁人形を作り、婆さんの写真を貼つた。
そして、午前一時。
神木に打ち付けた。

次の日の昼、婆さんは交通事故で死んだ。
罪悪感より、清々しい気分で一杯だった。

その日から、私は『呪い屋』を始めた。

午前一時、『細江』の藁人形を持つて、境内の裏へ行く。
(『細江』、恨みは無いけど、依頼だから。どうせ骨折位で済むん
だし。)

カン … カン …

釘を打つ音が境内に木靈する。

今日も、学校へ行く。

ご丁寧に、靴箱には鳩の死骸と、画鋲が入ってあった。
(上靴は鳩の血で真っ赤だった。)

真っ赤な上靴を履いて、教室へ行く。
ドアを開くと…ワオ。

水が降つて来た。

私はびしょ濡れ。

『アハハ』と、爆笑する声が聞こえる。

私は自分んお机の横に掛けた、体操服を取つて、トイレへ行つた。
着替えようと、体操服を出すと、体操服はボロボロだった。

保健室へ行つて、借りようとしたけど、保健医は居らず、その上、
貸し出し用の体操服は全て無くなつていた。

こんなびしょ濡れのなりで授業を受けるわけもいかず、一限目から、
屋上でサボる事にした。

もう夏も近い。

この様子では、直ぐに乾くだろ？
暖かな陽だまりの中、うつらうつらと、寝の事にした。

「……あん。」

誰だよ…五月蠅いな。

「お…い。…る。お…る。」

んだよ。解るようにな、日本語喋れよ。

「おい…起きあつてんだよ…!」

目覚めるなり、頬を打たれた。

「やつと起きたぜ、こいつ。」

「よく寝てられるよなあ。まじムカツク。」

「ちよつといつち来いよ…!」

腕を引かれて、連れて来られたのは、理科室。
昼間だというのに、薄暗く、尚且つ人体模型や骨格標本まであるので、不気味だ。

「これ、何だ？」

一人の子が笑顔で差し出した物。

それは、『硫酸』(じーて寧に『人にかけてはいけません』と注意書きがあった)

「硫酸。私が漢字も読めないバカだとでも思った?」

「まじで…?漢字読めたんだ。バカの分際で。」

「…」の硫酸、何に使うと思つ?..」

「知らねえよ。」

「正解はあ…あんたにぶつ掛けんだよ。」

流石に、硫酸は勘弁して欲しいよ。

「いいつ押えて！」

言うなり手を掴まれ、羽交い絞めにされた。リアルに硫酸掛けられる、リアルに5秒前。

足は自由だ

私は、硫酸を持ったそいつを、蹴った。

そいつは、転んだ。

「いやああああああああああああああ！」
その拍子に、持っていた硫酸は宙に舞い、そいつの顔に掛かつた。

悲痛な呻き声と皮膚を溶かす

そういう彼女の顔は、ゾンビの様に焼け爛れ、直視できない物だつた。

「キヤああああああああ！」

そう叫び、私を羽交い絞めにしていた奴らは、逃げていった。

すぐさま、私は彼女の顔を水で洗い、職員室へ行つた。

もちろん、あの時一緒に居た子達も。

「何をして、こんな事になつたんだ！！」

鬼の様な形相をして、担任は私達に尋ねた。

あ、
私の事か。

「今朝学校に来たら、靴箱に鳩の死骸が入つていて、その鳩の血が

付いて、じつなりました。」

『 むう…』と担任は唸り、話を元に戻した。

「何故、こんな事になつたのかね?」

誰も、口を開こうとはしない。

「では個人個人で話を聞こう。長谷川、来い。」

私の名前が呼ばれ、私は担任に付いて行き、進路指導室に入つた。

「どうして、こんな事になつたんだ?」

「村野さん達が、私を羽交い絞めにして、硫酸を掛けようとしてきました。だから私は村野さんを蹴つただけです。正当防衛です。」

(村野さんは確かに、私に硫酸を掛けようとした。リアルに。だから私のした事は正当防衛である。)

「单刀直入に聞くが、君はイジメにあつてているのかね?」

「…それは、ご自身で判断されてはいかがでしょうか?失礼します。」

「

そう言って、私は進路指導室を出た。

家に帰つてメールを見る。

『 新着メールなし』

今日は珍しく、メールが来ていなかつた。

久々に、ゆっくりと過ごせそうだ。

そう思つて電源を切るひつとする。

その時だつた。

ポンつとこつ音と共に『新着メール一件』の文字。

乙高校の長谷川加奈子を呪い殺してください。

私の事じやん。

ムリだな。

自分で自分を呪うなんて馬鹿な事、誰がするか。

私は、中学の時の卒業アルバムを引き出した。

(3 D … 村野は…あつた。)

私は、村野の写真、それと、その取り巻き達の写真を取つて、プリントアウトした。

そして、藁人形を出し、貼り付けた。

今夜、丑三つ時。

また、境内には、釘を打つ音が木靈する。

また、今日も学校へ行く。

今日は、村野と、その取り巻き達の机の上に、花瓶と、菊の花があつた。

(いつもは私の机にあるはずだけれど。)

村野は、昨日の事件で、顔が焼け爛れた事にショックし、自らの首を切り、自害した。

取り巻き達は、昨日、学校から帰る途中、トラックに轢かれたらし
い。

クラスの奴らは、泣く奴も居れば、『不憫だ』と噂する者も居た。
私はそのどちらでもなく、（良い気味…）と思つた。

葬儀は、今夜らしい。

葬儀に出ると、当たり前だが、村野や取り巻きの家族は泣いていた。
村野の母は、私に気付いたのか、近づいて来た。

「貴方が、長谷川さん？」

「そうですけど？ 何か？」

「貴方のせいで… 貴方のせいで、由香は死んだのよ… 私の娘を返して…！」

彼女はヒステリックに叫んでいた。

（婆さんにそつくりだなあ ）

「何とか言いなさいよ…！」

「…あんたの娘が、私に硫酸ぶっかけようと、して來たんだよ？ 蹤り飛ばしたとしても正当防衛です。その上、彼女が自ら死を選んだ事に私は直接、関与していません。私にそれを言つのは、お門違いなんでは？」

そう言つて、私は、式場を後にした。

次の日には、『村野たちを長谷川が呪い殺したんではないか』という噂が流れていた。

確かにそうだ。

私が呪い殺したんだもの。

正解。

気付いた人、100点。

学校では、私とすれ違う度に、皆恐れ、畏怖し、道をあけた。

本当に、良い気味。

まるで、自分が支配者になつたよう。

とても清々しい。

偶には、自分の為に他人を呪い殺すのも良いな。

偶には、自分の為に他人を呪い殺すのも良いな。

それから、私をいじめる者は居なくなつた。
だつて、私に逆らえば、私が呪い殺すもの。
死にたくないのなら、それが懸命な判断ね。

そして、誰もが、私に付き従うようになった。

私が、『あいつムカツク』と言えば、その日からそいつは、ハブだ。
『喉渴いた』そう言えば、飲み物を買ってきてくれる。
こんな女王様気分、一度は味わつてみたかったのだ。

でも、やはり、人間は信用できない。

現に、地獄耳の私は、ヒソヒソと悪口を言つているのも聞こえるし、
何より、今までの経験で、人間というものには、裏切られた記憶し
かないからだ。

どうでも良いけど。

学校から帰り、境内の裏の神木を見に行つた。

いつも、夜中にしか見ない神木。

夜中以外の時間に見たのは、初めてだ。

ふと、声がした。

「何！？」

振り返ると、私は闇の中に居た。

「ここ…どこ？」

ポツリ、ポツリと小さな鬼火が燈る。

私の目の前には、鬼と、閻魔が居た。

「ここは、地獄だ。」

「は？意味解んねえし！…早く帰せよ！…！」

「無理だな。」

「んでだよ！…！」

「人を呪わば、穴二つ。貴様は、死んだんだよ。」

ある朝、一人の少女が、神木の前で死んでいたそうだ。
彼女の死を悼む者は、誰一人として居なかつた。

(後書き)

「JR券で読んでトマトあいがといふれこもつた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9991d/>

呪い屋

2010年10月8日21時43分発行